# まちかど ネットワーク

## かしわ橋

### まだ見ぬ君へ…

## ヘンゼルとグレーテル

ハンディを持つ子とそうでない子が、地域でともに過ごす。言葉にすれば簡単に聞こえるけれど、実際には多くの壁が存在しています。

壁が邪魔しているなら、一枚一枚それを取り除いていけばいい。そんな願いから「ヘンゼルとグレーテル」のグループは誕生しました。

グループを結成したのは、平成四年十月。それ以来、市内の各公民館を会場にして、約二ヵ月に一回の割合で例会を開催しています。例会では各地域の子供を招き、障害を持つ子と一緒にお菓子をつくったり、人形劇や紙芝居を見たりするなど、壁を取り除くための地道な活動を続けています。「ヘンゼルとグレーテル」という名前は、お菓子と人形劇などの童話のイメージからつけられました。

二月十八日、岩松公民館で十三回目の例会が開催されました。岩松地区の子供と障害を持つ子供の約六十人は、仲よくプリン・ア・ラ・モードをつくり、プリンが焼けるまでの間は、メンバーによる人形劇を楽しみました。

「ヘンゼルとグレーテル」の代表である渡辺美折（みおり）さんは、

「ハンディを持つ子とそうでない子が地域でともに育つことが、当たり前のことになってほしい。市内の各地域を回って例会を開催しているのは、多くの人にそれを感じてほしいから。私たちのような活動が通学区単位で広がっていけばいいと思います。でも本当は、このグループを解散できる日が最終的な目標なんです。だって、それは私たちが願う世の中になったということなんだから。でも実際は、一人一人の人間の尊厳が本当に大切にされる世の中になるまでには、まだまだ…。もっと頑張らなきゃだめですね」と話してくれました。

☆**第十四回例会のお知らせ**

**とき** 四月二十二日(土)九時～

**ところ** 須津公民館

**内容** かしわもちづくりと人形劇

**問い合わせ** 渡辺方☎21―4558

---

ひと

ロゼシアターで「心に刻む アウシュヴィッツ展」を開催した

## 松下吉美（よしみ）さん

（比奈）

発端は、ごく日常的なことでした。八月のある日、食事の支度をしていると、テレビから一つの言葉が耳に入ってきました。その言葉は「アウシュヴィッツ」。数百万人の人が虐殺された、第二次大戦中の強制収容所のことです。松下さんの心の中になぜかひっかかって、気づいたときは受話器を握っていました。

電話をかけた相手は、アウシュヴィッツ展を開く会の全国事務局。話の中で松下さんは、今までアウシュヴィッツ展は全国各地で開催されており、次は三島市で開催する計画を立てていたものの、適当な場所がないために計画を断念することになった状況を知りました。

そこで「それなら富士市にロゼシアターというすばらしい場所がありますよ」とアドバイスしたことが、富士市でアウシュヴィッツ展を開くきっかけとなり、いつの間にか実行委員長に。

「私は楽天家なので、まあ何とかなるだろうと思っていたけれど、大間違い。最初に協力ボランティアを募集したら、全く集まらなくて…。結果的に百人以上のボランティアが集まりました。ほとんど仲間に助けてもらいましたね」

アウシュヴィッツ展には、多くの人が来場しました。

「富士市にも、平和を願う人が多いことを実感しました。だれもが戦争のない平和な社会を望んでいます。今まで私たちが知らなかった戦争の悲劇を、展示されたアウシュヴィッツ収容所の犠牲者の遺品や写真などから感じてくれたらと思います。

私も今まで、自分の子供と、戦争や平和について話し合ったことはありませんでした。来場してくれた人たちが、これを機会に親子で平和について話し合ってくれたらいいですね」